

その娘（こ）は、気付くと俺の横に立って、肩越しに俺の顔を見上げていた。

その日は、夕方から小雨がみぞれ混じりになり、冷たく俺の頬を濡らしていた。

俺は、ハッとしてその娘に目を向けると、その娘は、中指から小指までの3本の指を突っ立てオッケーのような形を手で作ると、首を少し斜めに傾けて、屈託のない笑顔で話しかけてきた。

「ねえ、オジサン、遊び行こうよ」

俺は、朝着てきたコートに手をかけ、一瞬躊躇して、もう一度そのコートを椅子の背にかけなおした。

「行ってきます」

俺は、元気に挨拶すると会社を後にした。

11月も月末近くなると昼の暖かさとは裏腹に朝晩はさすがにコートが欲しくなってくる。

俺は、某広告代理店の営業マン。入社4年目の26歳、田中健太。

この26年間俺は、ただ真面目にだけ生きてきた。そんな真面目だけが取り柄の俺にもようやく春がやって来ようとしていた。

俺は、取引先の小さな印刷会社の社長のお嬢さん、愛美（えみ）さんを一年がかりで口説き落とし、やっとの思いでデートに誘いだすことに成功した。

「おはようございます。社長、いらっしゃいますか？」

俺が、ドアを開けて中に入ると、デスクから横目でこちらをチラッと見る女性がいる。

俺は、この小さな印刷会社を必ず週に1、2度は訪れる。

「いらっしゃいませ。・・・でも、社長はお昼まで戻りませんよ」

「えっ！？でも午前中に約束が・・・」

その女性は、戸惑う俺をいたずらっぽい笑顔で眺めてから立ち上がると、納得したように一度うなずいて言った。

「嘘ですよ、嘘。社長は奥ですよ。・・・健太さん」

そう言って右手を奥の部屋の扉の方へ差し出した。

「あっ、ひどいなあ、愛美さん」

こんなやり取りをできるように一年かかった。愛美さんは社長の箱入り娘で、産まれてから今までずっと男性とお付き合いをしたことがないと言う噂まであった。そんな愛美さんは、大学を出ると、内定をもらっていた一流企業を断って、お父さんの小さな印刷会

社を手伝い始めた。

「あーあ、そんな嘘つくと、今年のクリスマス、デートに誘っちゃいますよ」

俺は、ちょっと口をとがらせて見せると、続けて言った。

「じゃあ、24日は、駅の銅像の前に18時。待ってますからねえ・・・」

半分冗談交じりで、愛美さんの方を伺うと、

「無理ですって、だって、今年のクリスマスは、もう先約が入ってまーす。ざんねーん」

若干、顎を上向き加減に、愛美さんは俺から目をそらした。

「えっ！？愛美さん、彼いるんですか？」

咄嗟に俺は質問を口走った。

「まだ、彼じゃないですけど、その人は・・・真面目だけが取り柄の人なんですよ」

俺は、一瞬宙を見つめた。彼などいないと思っていた愛美さんには、クリスマスと一緒に過ごす男がいる。そのことが俺の頭の全てを支配した。俺は、何も言葉にできず、ただ愛美さんの横を通り過ぎ、社長室のドアをノックした。

俺が、この会社初めて来たとき、今彼女が座っている席には彼女のお母さんが座っていた。いつからか、気付くとそのお母さんの席には彼女が座っていて、いつからか、気付くと俺は彼女に惚れていた。最初、彼女は、俺なんかに目向きもくれなかった。でも、俺が、この小さな印刷会社の門を叩くたびに、徐々にではあるが、彼女も俺に心を開いてきた。と、思っていた。一年がかりでふざけたざれ言も言い合えるようになって、やっと、やっと冗談交じりにでも誘ってみることができたと言うのにこの結果だ。愛美さんにはもうすでにクリスマス過ごす男がいる。ただそのことを確認しただけという結果になってしまい俺は落胆した。

俺は、社長との会話も頭に入らないまま、社長室のドアを閉めると、愛美さんには、ひきつった笑顔がばれないようにそそくさと会社を後にした。

俺は、それから2、3日全く仕事も手につかずに、ぼーっと毎日を過ごしていた。

♪♪こーいしちゃった♪♪・・・あの日の♪♪♪・・・♪♪・・・♪

突然、携帯が鳴った。この「着うた」も愛美さんと同じ曲にした。

「もしもし・・・」

「・・・あつ、健太さん？24日、18時、銅像の所、待っててくれますか？」

突然の電話は、愛美さんだった。でも俺は、その電話の意味が、よく分からなかった。

「えっ！？どういうことですか？24日ってクリスマスですよ？確か先約が・・・」

少しの間をおいて、また携帯から声がした。

「とりあえず来てくださいね」

プチッ、

「あつ、あのっ」

「・・・」

音のしなくなった携帯を俺はしばらく眺めていた。

でもとにかく、事情は分からないが、24日、愛美さんとの約束はできた。愛美さんと知り合って一年間、ずいぶん長い時間（とき）が経った気がした。何か、キツネにつままれたような気分だった。嬉しさ半分、疑い半分、そんなままで、俺は24日までの2,3週間で平然と過ごさなければならない。

しかし、こみ上げてくる喜びに、俺は、クリスマスが近づくにつれ、自分自身でも口元が自然に緩んでいくのを感じ、同僚の女子社員から変な目つきをされるくらい、浮ついた気持ちに支配されていった。

俺は、24日が来るのを指折り数えて、ついにその日はやってきたのだ。

2

その娘はポケットにねじ込んだ俺の腕を取ると、トコトコ歩き始めた。

「おいっ、ちょっと待てって。俺、待ち合わせしてるんだって」

少し力を入れて、俺はその娘に引っ張られている手を引き戻した。俺は、あまりに簡単に振りほどけたその娘の手によろけ、危うく駅前の銅像にぶつかりそうになった。その娘は、困った顔を見ると、

「知ってるよ、待ち合わせでしょ。でも、彼女来ないよ」

「えっ!？」

俺は、その娘の突然の言葉に、声を詰まらせた。

「えっ、なんでそんなこと知ってるんだよお？」

俺の叫びに彼女は繰り返した。

「知ってるよ。でも、来ないんだって。寒いよ。お腹もすいた。いいから、いこ」

確かに、手はかじかんでいた。いくら暖冬の東京とは言え、みぞれ混じりの12月だ、寒さが身に染みる。俺は、訳が分からず、半信半疑のまま、その得体の知れない娘にまた手を引かれた。時間は6時を15分回ったところだった。

俺は、うっすらと雪化粧された駅のロータリーを横切り、その娘に腕をがっちりガードされた状態で先導され、歩道橋脇のファミレスの扉を開けた。

水分をたっぷり含んだ雪の結晶が数粒二人の頭の上で光っていた。すぐに店員が二人の方に寄ってきて人数を確認すると、メニューを片手に席を指さした。二人が席に着くと、サンタの赤い帽子をかぶった別の店員が水を運んできた。

目の前の娘は、明るい照明に照らされると大人っぽい服装とは裏腹に顔はまだ幼さ残る少女のように見えた。

「じゃ、とりあえず、中ジョッキと赤ワイン。あっ、今日はクリスマスだからワインじゃなくてシャンパン。ボトルで。甘いやつね。それから・・・」

メニューをパラパラしながら目の前の女の子は次々に注文を赤いサンタの店員に告げた。
サンタは、注文を繰り返すと下がっていった。

「ちょっと、君、いくつなの、一体？」

アルコールを躊躇なく頼んだそのあどけない女の子を俺はもう一度覗き込みながら言った。
その娘は間髪入れずに応えた。

「18っ」

「えっ！？まだ、未成年じゃないかぁ、お酒はだめだろお」

その娘は少し眉を寄せて俺の言葉に被せるように応えた。

「何言ってるの、おじさん、堅いこと言わないの。18って言ったら立派なレディだよ」
なんとも無邪気で、何一つ悪気のないその娘の瞳は、もういい歳した俺の心を一瞬で吸い込んでしまいそうなほど澄んで綺麗だった。しかし、その瞳の奥には、何か影を潜ませていて、でもそれを必死に表に出さないように明るく振る舞っているその娘の姿を、俺は全く気付くことができなかった。

「あのさぁ、さっき彼女は来ないって。もしかして、愛美さんの知り合い？彼女から何か聞いてるの？なんで愛美さんは来ないの？」

「ちょっと、質問は一つずつにしてよ」

俺の立て続けの質問に、その娘は顔を曇らせて言った。

「あたし、頭悪いからいつぺんにいくつも答えられないよぉ。・・・それにもっと楽しい話しよーよ。彼女は来なかったんだし、今、あたしと一緒になんだから、それでいいじゃん」
俺は、絶句した。

全然よくなかった。俺にとっては、一年がかり。しばらくぶりの春のはずだった。愛美さんが来なかったと言うことは、とんでもなく大事なものを突然奪われてしまったような心持ちだった。

しかし、何故なのだろう？その娘の「いいじゃん」は、魔法の「いいじゃん」だった。全ての失敗も、気持ちの落ち込みも、あっという間にみんな水に流し去ってしまうような魔法の「いいじゃん」だったのだ。テーブルを挟んで、その娘の「それでいいじゃん」と、そのあどけない笑顔で、俺は、本当にもうどうでもいいと言うような気分になっていった。

トナカイの格好をした店員が、ジョッキとシャンパンのボトルを運んできた。すぐに続いてピザとパスタ、ポテトなどがテーブルに並んだ。

その娘は自らグラスに並々シャンパンを注ぐと

「とりあえず、かんぱーい」

そう言って差し出されたシャンパングラスに、俺はジョッキを近づけると軽く頷いてみせた。その娘もちょうと首をすくめると、元気にグラスを重ねた。チーン

「ぶふえ、あまー。このシャンパン甘くて飲めないよぉ、おじさんにあげるう」

「えーっ！？なんだよ、お前が頼んだんだろ、甘いやつって」

俺の言葉も耳にせず、ポテトを忙しそうに口に運んでいるその娘を見ると、最初眉間にしわ

を寄せていた俺の顔も次第にほぐれていった。

くだらない世間話をしながら小一時間が経過した。窓のからの景色はすっかり真っ白になり、週末のクリスマスだと言うのに行きかう人は少なく、タクシーだけが信号の変わるのを待ちきれないようにせわしなく動いていた。

俺は、楽しく会話を弾ませながら、でもまだなお、愛美さんが来なかったと言う苛立ちも心の奥底にあったのか、この短い時間の間に、ジョッキを2杯、甘ったるいシャンパンのボトルを空け、さらにウイスキーの水割りまで飲んでいた。

「もうお腹いっぱい。おじさん、出よ。ごちそうさま」

「・・・ああ・・・」

俺の身体は大量のアルコールで火照っていた。

俺は、虚ろな目でその娘に目をやると、その娘は、相変わらずの笑顔でもう先に立ち上がっている。俺も続いてよろよろテーブルから這い出ると、レジの方へ歩いた。財布からお札をつまみ出すと表示された金額も確かめずにトナカイに手渡した。俺は、トナカイの差し出したおつりと共にレシートを財布にねじ込んだ。扉を開けるとその娘は俺の手を引き歩き出した。雪は止み、歩道には前に歩いた人の足跡だけが点々と続いていた。俺は、瞳を閉じると、そのまま道端に寝転んでしまいそうになるのを辛うじて耐えながら、どこを歩いているかもはっきりせずその娘に手を引かれていた。

20分ほど歩いただろうか？

俺は、半分意識を遠のかせながらその娘に促されるようにゴロンと横になると、

「着いたよ」

と言う、その娘の一言を聞いたような気がした。

俺は、もうろうとしながら、重たい瞼をゆっくり持ち上げた。

「・・・はあっ！？」

俺は、声と共に首を横に振った。

俺の目に飛び込んできたのは、なんと、天井の鏡に映った俺自身だった。そして、振った首の左右の目に飛び込んできたのは、丸いベッドの端だった。

「はあっ！？」

もう一度、声を上げると、俺は硬直した。この状況を全く理解できないまま、俺は、固まった。身体中のアルコールが一気に冷や汗となって出て行った気がした。

なおも俺が、挙動不審に目だけをキョロキョロさせていると、その様子をベッドの端にちょこんと座って眺めていたその娘は言った。

「前金だからね」

その娘の手はオクケーのような形で中指から小指までの三本の指が突っ立っていた。

3、

俺は起き上がると、ぼやけた頭をフル回転させたが、訳が分からないまま、手では反射的に財布を開いていた。

「そんなに持ってないぞ。って言うかなんでお前に金を払うんだよ」

ろれつが怪しい俺の言葉に、その娘は続けた。

「だって、その気で着いてきたんでしょ？いいよ、ごはんおごってもらったし、・・・いいよ、2で」

その娘は、意味不明なことを口走ると、財布を覗き込んできた。俺は、咄嗟に財布をその娘の陰になるように後ろに向けると、一万円札を二枚取り出して、その娘の方に向き直った。

その時の俺は、何故そんな行動をとってしまったのか後になっても分からないが、その時は、そうすることで、何か、自分を正当化しているような気にでもなっていたのかもしれない。

その娘は、その二枚のお札を見るや否や、小さな声で

「まいどありー」

そうつぶやくとお金をむしりとった。

「じゃ、お風呂入っていい？ってか、おじさん、一緒に入っちゃう？」

その娘は、なんの悪気もなく、そう言うと、もう上着を脱ぎ、風呂の扉の前でこっちを向いて手招きしていた。

俺も、お金を渡した時点で、現状を全く把握できない訳ではなかったが、こんな状況が待っているとは夢にも思っていなかった。俺は、桃源郷にでも突然連れてこられてしまったのだろうか？半分夢見心地でヨロヨロ歩くと、薄く開いている風呂場の扉を引いた。

気付くと、ドボドボお湯が蛇口から溢れ出ている狭い湯舟に、裸の男と若い裸の女が二人でひしめいていた。

俺は、一足先にユニットバスの扉を開け、備え付けのバスローブを羽織ると、脱ぎ捨ててあるスーツの上下をハンガーにかけた。そのまま、ベッドの端に座ると、すぐに続いてドアが開いた。しかし俺は、何故か、見てはいけないものを見てしまったように思い、枕もとの照明のスイッチに寝そべるように手を伸ばし、少し明かりを落とした。薄暗い中で、その娘は、俺が起き上がってしまう前に急ぎ足でベッドに駆け寄ると、俺の脇に横たわった。

丈の短いバスローブを着て丸いベッドに横たわっている二人は、しばらくそのまま動かなかった。しかし、沈黙に耐えきれなくなったのか、次の瞬間、二人同時に口を開いた。

「・・・あのさ・・・」

「・・・あの一、・・・ねえ、左手貸してよ」

その娘は、俺の「あのさ」を遮るように言葉をつづけて、返事を待たずに俺の左腕を取ると自分の頭の下に入れた。その娘は安心したように目をつむった。俺は、一息深呼吸すると、天井の鏡の中の二人を見つめながら言った。

「・・・あのさ・・・、こんなことしょっちゅうしてるの？」

何となく、この娘は、いつもこんなことをしている娘ではないように思えて俺は聞いた。

「こんなことって？・・・・・・・・お金に困るとね・・・・・・・・」

その娘は、目をつむったまま答えたが、俺には全く理解できなかった。

「なんで俺なの？なんで俺に声かけたの？」

怪訝な目つきで天井の鏡を見ながら続けて聞いた。

「・・・ついてきそうだったから。・・・簡単でしょ。それに、お金持ってそうって思ったから」

「俺、お金なんか持ってないぞ」

鏡の中のその娘に言った。

その娘は鏡の中の俺に答えた。

「でも、いいコート着てた……。アルマーニでしょ？そのコート」

そうなのだ。このコートは俺のばあちゃんが、就職祝いに買ってくれた最高級のものなのだ。

「って言うかさあ、するの？しないの？しないならしないでいいけど、お金もらってるから悪いじゃん。するんでしょ、・・・いいよ」

その娘は、パッチリ目を開けて少し早口で言うと、俺の腕に乗っけている顔をこっちに向け、チラッと見た俺の目と自分の目を逸らさないように左肩の辺りまで顔を近づけてきた。俺は、ドキッとしながらも伸びきった左手を曲げ、そっとその娘の肩に手を回した。きゃしゃでちっちゃなその娘の肩は、バスローブの上からでも熱を感じるほど熱かった。その娘は、自分の手を俺の胸に当てると、火照った額を俺の頬に擦り付けてきた。俺は、その娘の肩を抱いた手はそのままに、もう片方の手で、ゆっくりその娘のバスローブの紐をほどいた。でも俺は、その時まで、この左腕の中にしっかり納まっているこの幼い少女と、最後の一线を越えるとは思っていなかった。この後、どうなってしまうかより、今日まで真面目一筋に生きてきた俺の人生の道のりを頭に思い浮かべ、自分自身に問いかける方が先だった。

しかし、この娘は、俺のそんな半生の回想などお構いなしに、俺の胸にあてがった小さな手をバスローブの中に忍びこませて、人差し指で、俺の少し立った乳首を擦ってきた。

俺は、声が出そうになった喉に唾液を流し込み、肩を抱いていた左手でこの娘の頭を数回撫でた。するとすぐに少女は、俺に覆いかぶさるように俺の空いている右手を掴んで、自分のバスローブの中の胸まで持って行った。すでに紐のほどかれたバスローブの隙間からその娘の左胸まで俺の右手が届くことは容易かった。幼い顔と裏腹に大きめの胸は柔らかく、隙間から見えるピンク色の乳首はツンと上を向いていた。俺が、手を動かしたわけではない。その娘が、体制を整えようと若干動いた瞬間、俺の右手の中指がその娘の左胸の乳首に触れてしまった。少女は、小さく「あっ」と声を漏らした。

俺は、急激に頭に血が上っていくのを感じながらも、まだ、辛うじて理性を保っていた。俺は、冷静を装うかのように、俺の頬に触れていたその娘の額にそっとキスすると耳元で囁いた。

「俺、別にしなくてもいいんだよ」

その時俺は、自分の今までの人生なんかより、何故か、純粋にその娘を大切にしたいと言う気持ちが芽生えていた。そんな感覚の中で出た言葉がそれだった。

しかし、その一言は、逆にその娘のプライドを大きく傷つけたのかもしれない。その娘は、俺のその言葉とほぼ同時に、急に我に返ったかのように、それまで俺の胸の辺りに当てていた左手をいきなり俺の下半身に持って行き、トランクスの上から俺のペニスを強く握った。俺は、小さく「うっっ」と声を漏らした。そして、その瞬間、俺の脳の中で何かが弾け飛んだ。

俺は、突然その娘の上に覆いかぶさると、左手で今度は、がっちりその娘の肩を掴み、その娘が身動きできないように捕まえると、俺の空いた右手でその娘の胸を鷲掴みにした。その娘は首を少しのけぞらせるように動かししたが、声は全く出さなかった。俺は、そのまま、その娘の唇を奪い、声の自由も完全に支配した。俺は、胸を鷲掴みにしている手をその娘の顔に回し、髪をかき上げるように耳に触れた。その手を耳から首筋、肩、そしてまた胸へ這わせた。その娘は、少し身体をくねらせ、俺の背中に爪を立てた。俺は、手を胸からお腹、お腹からわき腹、わき腹から太ももへと進ませた。そして、太ももから内ももへ手を持って行った。それと同時に、その娘の唇に重ねていた唇をその娘の耳まで移動し、耳たぶを軽く噛んだ。

「あああああ」

その娘の自由になった口からため息がこぼれた。

その時、俺の右手は、彼女の内ももから滴り落ちていた雫を感じた。

俺は、興奮の絶頂を迎え、慌てて枕もとのゴムを探した。その瞬間、その娘は、震えるような声で言った。

「・・・大丈夫。ピル飲んでるから・・・」

4、

「えっ!？」

俺は、枕もとの手を止め、その娘の言葉に耳を疑い、目の前の娘を凝視したが、その娘は目を閉じ、再度口を開くことはなかった。

半信半疑で、俺は、その娘のバスローブに手をかけゆっくり脱がすと、俺も着ているものを全て脱いだ。その娘は、何も抵抗することなく、俺の手の動きに合わせるように身体を動かした。もう俺も迷うことなく目の前の幼い娘を自分のものになすことだけを考えた。

今度は、俺は自らその娘の首元へ左手を滑り込ませ肩を抱くと、その娘の乱れた髪を手グシ

で直し、そのまま額にもう一度キスをした。その娘は、目を開けて俺の顔をチラッと見たが、重たそうな瞼をすぐに閉じた。そして、両手を俺の首の後ろに回した。全てを俺に預けるように、何も言わず、目を閉じたままその娘は、動かなくなった。

俺は、額に触れていた唇をゆっくり下ろし、その娘の唇と重ねた。その娘は、少し顎を上げ、俺の唇を強く吸うと自分の舌を俺の口の中へ押し込んできた。俺もそれに応え、舌を絡め、長い間、その娘と熱い口づけを交わした。俺はその間、右手で胸を優しく揉み、親指と人差し指で乳首を摘んだ。キスが長くなるにつれ、その娘は、徐々に息づかいを荒くしていった。

俺が唇を離そうとすると、その娘は、俺の首に回した手に力を入れ、もう少しのキスをせがんだ。俺は、その手を優しく掴むと俺の手のひらと合わせ、指を絡ませた。そして、唇をゆっくり胸まで動かした。

俺は、その娘の手と合わさっている手の指に力を入れギュッと握りしめると、その娘の胸元に持っていった口で乳首を吸った。その娘は、必死で声が出ないように我慢しているようだったが、俺がその娘のピンクの乳首に軽く歯を立てると

「あああああ」

我慢しきれず甘い吐息を漏らした。

俺は、手を下半身まで持っていき、その娘が十分に濡れていることを確かめると、また、手を握り直して、俺のいきり立ったペニスの先をその娘の濡れた割れ目にあてがった。一瞬、その娘の眉間にしわが寄ったように見えたが、俺は、気にせず、その娘の中へ、俺のペニスをゆっくり侵入させていった。

「んんん」

その娘は、うめくように声を上げたが、ペニスはほんとにも簡単に吸い込まれるように奥深くまで導かれていった。しかし、俺の身体の下で、幼い娘は、口を真一文字に結び、歯を食いしばっていた。俺は、その娘のそんな姿が愛おしく、感動さえ覚えた。そんな中で、俺の一度動かし始めてしまった腰は止めることなどできず、動かし続けるしかなかった。そして俺は、腰の動きと共に、もう一度その娘の唇に吸い付いた。

「ああ」

吸い付かれたその娘の口元からまた甘い吐息が漏れた。

一瞬、俺の手を握るその娘の手に力が入った。俺の背中に回したもう片方の手も俺を締め付けた。それでも俺は腰を動かし続けた。その娘の身体は大きくのけ反り二人の合わさった唇も離れていった。

俺は、さらに腰の動きを速めて、最後に強く、激しく、強く強くその娘を突くと、その娘の中へ全てを出し切って、ため息と共にその娘の大きめな胸の上に倒れこんだ。その娘も最後の喘ぎ声をあげると、さらに身体をのけ反らせ軽い痙攣のように身体をビクつかせてシーツを握りしめた。そして、そのまま動かなくなった。

俺は、何故だかわからない、果てる瞬間、本当に果てるほんの一瞬、愛美さんの顔が頭をよ

ぎったような気がした。

「重いよ」

しばらくして、その娘の声で、ハッとし、俺は慌てて重なるように乗っかっていたその娘の上から横に転がった。その娘の首の下に入ったままになってしびれかけた左手を抜こうとすると

「そのままにして」

その娘は訴え、俺の左手を押さえた。

俺は、抜きかけた手をそのままに、その娘に聞いた。

「名前、聞いてなかったね。なんて言うの？」

「あたしは美咲。美しく咲くって書くの。全然美しくないけどね。・・・おじさんは？」

この状況で、まだ、おじさんか、と、ちょっとムッとしながらも

「あっ、俺は、・・・けーた」

一瞬、迷い、偽名を使った。俺は、嘘をついた。

「ふーん」

「あっ、そうだ、それより、俺の質問にまだ答えてもらってなかった。今日、俺の彼女が来なかった理由、教えてよ」

俺は、美咲と名乗る隣に横たわっている娘が、最初に愛美さんが来ないと言った理由をまだ聞いてないことを思い出した。

「彼女？理由？知ってるわけじゃないじゃん。なんで初対面の人に彼女がいるか、いないかなんてわかるの？あたし、超能力者じゃないしい」

薄暗い部屋の中で、ぼんやり天井の鏡に映る二人はまるで恋人のようだった。

「あのさ、美咲さんっ。あなた、自信満々に彼女は来ないって俺に言ったよね？確か」

「言ったよお。だって考えてみて、クリスマスの夜に待ち合わせするのに男同士で待ち合わせなんかする？だから、相手は女性でしょ。それにあんな寒い中で一時間も時計と携帯を気にしながらキョロキョロと……。全く連絡がないってことは、もう来るわけないよ。普通の日ならまだしも、こんな大切な日に……。いつも時間守らない人だってちゃんと来るよ」
美咲は早口で一気にしゃべるとさらにつづけた。

「だから、声かけたの。振られた人は、絶対着いてくるから・・・」

振られた、という言葉に若干の異存を感じながらも、考えてみれば全くその通りだった。この時ばかりは、10近くも年下のこの娘が年上のお姉さんのように感じた。

「ねえ、それより『定期』にならない？」

「えっ！？定期ってなに？」

5、

「えっ！？定期も知らないの？」

美咲は、本当にびっくりしたように俺の顔をまじまじと眺め、しばらくして口を開いた。

「真面目なんだね。・・・言葉のまんま。定期的に逢いましょうってこと。定期になってくれるなら2でいいよ。月2，3回逢ってくれるなら1.5でもいいけど・・・」

俺は、美咲の質問には応えず黙っていた。俺は、美咲と結ばれている間中ずっと、美咲と恋人であるかのような感覚でいた。美咲と昔から付き合っていたかのような錯覚さえ感じていた。それなのにこの娘ときたら俺としながらそんなことを考えていたのだ。

やはり、いくら若いとはいえ、お金を取って身体を売っている、所詮この娘も売春婦と一緒になのだろうか、そんなことに想いを廻らせているうちに、俺はいつしか眠ってしまった。

♪♪こーいしちゃった♪♪・・・あの日の♪♪♪ ♪♪・・・♪

どのくらい寝ただろう？俺は突然なった携帯の着うたで目が覚めた。

「・・・もしもし。・・・昨日はごめんなさい、愛美です」

「えっ！？愛美さん？」

俺は跳び起きた。そして、その瞬間、素っ裸の自分自身に気が付いた。急に恥ずかしくなり、掛布団を腰に巻いた。

「あの・・・、もしもし、健太さん？聞こえてます？やっぱり怒ってますよね？」

「あっ、いや、そのお・・・」

口ごもる俺に、愛美さんは続けた。

「本当にごめんなさい。昨日、突然お父さんが倒れちゃって」

「・・・ああ、そう・・・なんだ。・・・あの、いや、・・・別に、怒ってない、・・・ですよ。・・・はい」

怒っているどころか、昨日、俺は、こんなことになってしまい、愛美さんからの突然の電話に、この状況を後ろめたい気持ちにさえ感じていた。

「あの、健太さん、今日もう一回逢ってもらえませんか？昨日のお詫びも・・・。今日、健太さん、お仕事ですよね？」

「あっ、はい、あの、ええ、お仕事です・・・。ええっっ！？あああ、すみません、あの、また、連絡します、必ず」プチッ

「お仕事・・・まずい、遅刻だあ」

枕もとのトランクスに手を伸ばし、独り言を叫びながら、俺は、掛布団を投げ捨てた。

時計の針は、朝礼開始時間の7分前を指していた。昨日の蜃気楼のような一夜から一瞬にして厳しい現実タイムスリップしてしまった。

真面目にだけ生きてきた俺は、当然、入社以来、無遅刻無欠勤。ワイシャツの袖に腕を通してながら知恵を絞った。

「あれっ！？美咲は？？？」

そう言えば、突然の出来事に美咲のことをすっかり忘れていた。

「おーい」

ズボンに足を突っ込み、辺りを見回した。しかし、美咲の姿はなかった。ネクタイを締めながらユニットバスの扉を開けて美咲がやはり居ないのを確認して愕然とした時、ふと考えが頭に浮かんだ。

「そうだ」

美咲が居なくなったことと、会社への対応と、俺は、いっぺんに色々なことが頭の中を駆け巡っている中で、素早く携帯を手にとった。その携帯のボタンを押そうとした瞬間、俺の目は、画面にくぎ付けになった。そこには、なんと、美咲からの伝言と携帯の番号が『待ち受け画面』になっていたのだ。さっき、愛美さんからの着信の時には、そんなことは全く気付かなかった。

『けいたさん、昨日はごめんなさい。また今度逢った時に詳しくお話します。ごめんなさい』
そして、携帯番号が書かれていた。

「んんん、何だこりゃ？ごめんなさい？」

訳が分からないまま、それを詮索している暇はなかった。慌てて会社の番号を押した。

トゥルルルー　トゥルルルー

「あっ、営業の田中です。おはようございます。部長、いらしてますか？」

早口で、電話の女性に告げると、女性の返答を待つ前につづけた。

「あの、石原印刷の社長が昨日倒れてしまったらしく、これから病院によって、それから出社します。部長に伝えておいてください。よろしくお願いします」プチッ

俺は、勝手にホッと一息つくともた美咲を探し始めた。

それにしても、この「ごめんなさい」とは一体どんな意味なのだろう、と眉をしかめながら再度、部屋を歩き回った。しかし、ホテルの狭い一室、どこをどう探そうが美咲を見つけることなどできるはずもない。

俺はベッドに腰を下ろすと、改めて美咲が居なくなったことを実感した。そして、頭には昨日の一部始終が鮮明に甦ってきた。真面目一辺倒の俺には、昨日の晩のことは刺激が強すぎたのかもしれない。俺の愛しの愛美さんから電話をもらったと言うのに、俺の頭の中は、昨日の美咲との夜のことであふれ返っていた。

俺は、もう一度、ゆっくり昨晚のことを思い出しながら、たとえお金を払ったとしても、一夜限りの疑似恋愛ができると言うのであれば、これはこれで悪くないのかもしれない、なんて、とんでもないことで頭の中の思いを膨らましていた。

しばらくして、俺は、ふと我に返り、手に持ったままになっていた携帯で愛美さんの番号を

探した。俺は、危うく気でも狂ったかと自問自答しながら現実の愛美さんの声を聞いた。

「もしもし」

「・・・あっ、もしもし、田中です。さっきはすみませんでした」

愛美さんの声は、優しくかった。

「あっ、いえ、私こそ突然すみませんでした。あの・・・、今日、お仕事終わったら逢ってもらえませんか？・・・あの、まだ、今日が終わるまでは、クリスマスですから・・・」

「クリスマス？・・・あ、はい。わかりました。じゃ、僕もなるべく早く仕事片付けますから、昨日と同じ場所に同じ時間、待っててください。それじゃ」プチッ

俺は、会社に向かう道すがら、途中の喫茶店でモーニングを注文した。俺は、昨日の美咲と今晚の愛美さんとに、交互に想いを馳せながら新聞を読み、ゆっくりコーヒーを飲んだ。

「そろそろ会社へ行ってもいい時間かな？」

俺は、ブツブツと独り言を口にしながら喫茶店を後にした。

その日は、朝のごたごたとは打って変わって何事もなく平凡に過ぎていった。5時を回ると、俺は、会社を出て、待ち合わせの場所へと急いだ。ついに、念願の愛美さんとのデートを前に、俺は嬉しさと歩調を自然と速めていた。

今晚は昨日の寒さとは比べ物にならないほどの暖かさで、コートを着て小走りに歩くと少し汗ばんだ。月はぼんやり傘を被り、明日の雨を予感させるのに十分な晩だった。

銅像の前で、愛美さんが俺の目に映った時、彼女は笑顔で手を振り、彼女が小走りでこちらに向かってくる様は、まるで羽の生えていない天使でも見るようだった。

「こんばんわ、昨日はごめんなさい。待ちました？」

「いや、待ってないです。いま来たところ」

まだ待ち合わせ時間の10分前だったが、実は、俺はそのさらに20分も前から待っていた。

「じゃ、行きましょうか？」

俺はそう言い、二人のデートの一步目を踏み出した。そして、その歩き出した瞬間、

「ええっ！？」

俺の目に見覚えのある女の子の影が突然飛び込んだ。

「みさ・・・あっ」

びっくりしてこちらを直視している愛美さんに振り向くと、俺は何もなかったかのように首を左右に振ってまた歩き出したが、動揺の色は隠せず、愛美さんは不思議そうにまだ俺の顔を眺めていた。

6、

驚きの声をあげながら、また歩き出した俺に、愛美さんは

「どうしたの？急に」

まん丸い愛美さんの目が俺を見つめていた。

「い、いや、なんでもない。行こっ」

俺は、何もなかったかのように歩き続けたが、やはり、動揺の色は隠せていなかったようだ。まさかの、目に入った女性は、まぎれもなく美咲だった。昨日の今日で、また男探しをしているのかと思うと怒りさえ覚えた。でも俺は、まだその怒りの本当の意味を理解してはいなかった。

俺は、予約を取ったレストランまで、動揺を悟られないよう極力普通に振る舞い歩いたが、頭の中は、常に美咲の笑顔が俺に語りかけていた。その美咲が今日も男といやらしいことをしているかと思うと尋常ではいられなかった。

しばらく歩き、白を基調とした小ざっぱりしたイタリアンのレストランに着くと、俺は椅子の背を引き、愛美さんを座らせ、手を洗う仕草をしてみせると、早々にテーブルを離れ、化粧室の扉を開けて飛び込んだ。中に入るが早い俺はポケットから携帯を取りだし、今朝美咲が残した携帯番号のボタンを押した。

トゥルルルー　トゥルルルー

「あっ、俺、けーた。俺、お前と定期になること決めたから。だから、もう男と会うのやめろ。なっ、わかった？」

俺は、必死だった。携帯から、美咲の声を聞く前に一方的にしゃべり続けた。俺は、美咲が俺以外の男と会うのを阻止しようとして必死だった。俺は、美咲がこれ以上見ず知らずの男たちに汚されていくのが、どうしても許せなかったのだ。

「何？急に。じゃ、おじさん、これから逢ってくれる？」

「えっ！？いやぁ・・・これからは・・・無理だけど、明日・・・、じゃ、明日逢おう。とにかく、もう、男と会うなよ。いいな」

俺は、強引に約束させ、携帯を切ると、席に戻った。我ながら勝手な男だと自分を責めつつも愛美さんには笑顔でほほ笑んでいた。しかし、愛美さんの顔を眺めながら、よぎる美咲の顔は、ぷーっと頬を膨らませていた。

予約してあった、ワイン、コース料理が運ばれてきて、愛美さんとの会話も弾んだ。メインのお肉がテーブルに並んだころには、美咲の顔もほとんど俺の前には現れなくなっていた。

「ねえ、健太さん、これ、受け取ってもらえます？」

愛美さんが、そう言って俺の目の前に差し出した小箱にはリボンが付いていた。

「あっっ！？」

そのリボンを見た瞬間、俺は、あることをすっかり忘れていたことに気付いた。急に俺は、スーツのポケットをまさぐった。あった。ポケットの一番隅っこにそれはあった。それは、コインロッカーの鍵だった。

「どうかした？」

急に声を上げて、ごそごそとポケットに手を突っ込んでいる俺を見て、愛美さんは不思議そうにしていた。俺は、ポケットから手を出すと

「ううん、なんでもない。それより、開けていい？」

俺は、箱を開けた。

「あ、時計だ。この時計めっちゃ格好いいね。ありがとう」

俺は、その場で腕時計をして愛美さんの方に向けてみせると、リボンのついた小箱をポケットにねじ込んだ。

コースのデザートとコーヒーが運ばれてきた。二人は終始和やかに、そして、お互い、昨日何があったかなどを気に留めることもなく、時が流れていった。

「そろそろ帰りましょうか？健太さん。明日も病院に行かなくちゃいけないんです。ごめんなさい」

「あっ、いえ、いいんです。あっ、あの、駅まで送ります」

財布を出しかけた愛美さんを制して、俺は会計を済ませた。

「時計のお礼です」

駅までの帰り道、俺は、わざと歩く速度を遅らせ、彼女との時間をゆっくり進めた。愛美さんも俺に歩調を合わせ、俺の左側をゆっくり歩いた。もう、その時の俺の頭から、美咲は完全に消え去り、俺は、愛美さんとの時間がこのまま止まってしまえばいい、などと思っていた。俺は、夢見心地の中にいた。

駅の屋根がぼんやり見えてきた頃、愛美さんは急に口を開いた。

「あの、健太さん、前に私、好きな人がいるって言ったよね」

「えっっ!？」

その愛美さんの一言で、俺の夢見心地のひとは音を立てて崩れ去った。そう、俺は、俺が最初に冗談で愛美さんをクリスマスに誘った時のことを鮮明に思い出したのだ。そうなのだ、愛美さんは、その時、確かに、クリスマスは先約があるから俺とは過ごせない、そう言ったのだ。それをこのタイミングで言われるのか、と気を動転させていると、愛美さんはまた話し始めた。

「あれ、・・・実は、クリスマスの予定って嘘だったんだ。好きな人がいるのは本当なんだけど、・・・でね、その好きな人っていうのが・・・」

愛美さんはそこまで話して口ごもった。俺は戸惑い愛美さんの次の言葉を待った。しかし、その時の俺は、死刑執行を待つ死刑囚のような面持ちでいた。たった数秒間を何時間もの、とてつもなく長い永遠の時間のように感じていた。その地獄のような数秒間をじっと待つと、愛美さんはおもむろに口を開いた。

「・・・あのね、健太さん、・・・あのね、・・・あなた・・・なの」

「・・・」

時は凍り付いたように二人は立ち止ったまま動かなかった。

「・・・」

「えええっ！？」

俺は、耳を疑った。当然、誰か他の男の名前が出て、この俺は、即、ジ・エンド。楽しいひと時もここまで、天国から地獄へ一瞬の間に引きずり落とされると思っていた俺は、しばらく何を言われたのかすら全く理解することができないまま歩き出した。

「あのね、私、小さい頃から、好きな人ができたら、絶対、クリスマスに自分から告白するって決めてたの。だから嘘ついちゃった。ごめんなさい」

「ああ、いや・・・」

もう、そんな嘘はどうでも良かった。そんなことよりも、俺が一年間想いを寄せた愛美さんが、俺のことを好きだと言ってくれているこの状況。俺は、しばらく雲の上をフワフワ散歩しているような感覚に囚われ歩いていた。俺は、あまりのことに愛美さんの存在まで忘れたように駅までフワフワして歩いた。駅の改札を目の前に、

「あっっ！！」

俺は、大きな声をあげ、2，3歩後ろに着いてきた愛美さんも目を丸くして立ち止った。

「ちょっと待ってて、すぐ戻るから」

俺は、振り向むくが早いかそう言い残して走り出した。

愛美さんは「あっ」と喉を詰まらせて俺の方に手を伸ばしたが、すでに俺は駅の外へ見えなくなっていた。俺は、走りながらポケットのリボンの小箱のさらに奥に手を突っ込んで、その時、立ち止った。俺の目の前には、コインロッカーが道をふさいでいた。

月の傘は取れたものの、夜空には雲が広がり、いつ降り出してもおかしくない雨の足音はすぐそこまで迫っていた。

7、

俺は、コインロッカーに鍵を差し、中のものを大切に取出した。俺は、後ろを振り向き、小走りに愛美さんのもとへ戻りながら、ロッカーから出したものが愛美さんに見えないよう、背中に隠した。不安げにこちらを窺っている愛美さんの前まで行くと、

「これ、今日のお礼」

そう言って、俺は、背中に回した手を差し出した。

「えーーーーっ!？」

驚きの声を上げた愛美さんの眼はまん丸だった。そして、ちょっと潤んでいるかのようにも見えるその瞳には、真っ赤なバラの花が映っていた。嬉しそうにバラを受け取った愛美さんは俺の目を見つめ

「ありがと」

そう一言だけつぶやいた。その瞳は、あまりに純粋に喜んでくれているようで、俺は、なぜか目をそらしてしまった。

「どうしたの？これ。用意してくれてたの？」

もう一度目が合った時、愛美さんは俺に聞いた。

「うん、でも昨日から入れてて、今日暖かかったから、つぼみ開いちゃってるね」

「入れてて???・・・えっ、健太さん、昨日から用意してくれてたの？ごめんなさい」

愛美さんは、昨日のドタキャンを本当に気まずそうに、視線を下げて首を曲げた。

俺は、首をブルブル左右に振ると改札の方へ愛美さんの背中を軽く押した。背中を押されて歩きだした愛美さんと俺は、改札の中へゆっくり消えていった。

電車の窓ガラスに叩きつける雨のしぶきで俺はフッと我に返った。見るでもなく、真っ暗な外の世界を、窓越しにボヤーとした目つきで見つめていた俺は、

「愛美さん、傘、持ってたかな？」

独り言のように呟いた。

ホームで電車に乗り込んだ愛美さんに手を振って別れた俺は、行先も見ずに反対側のホームに止まった電車に跳び乗り、そのままドアの所に突っ立っていた。今日の出来事を思い返すと、我ながら怖いくらいに全てがうまくいった。帰り際に花を渡した時の愛美さんの嬉しそうな顔を思い出すと、自然と俺の顔もほころんでくる。箱を開けて腕時計を見た時の俺の喜びと言ったら、もうこれからの人生、何が起こっても笑顔のまま生きていけるのではないかと思ってしまうほどの喜びだった。待ち合わせの時の愛美さんの笑顔は、まるで天使が舞い降りてきたかのようなだった。そう、そして、そこで美咲を見かけ・・・。

「美咲?!」

俺は、電車の窓に向かって声を発した。周りの乗客は、一斉にこちらを振り向いた。しかし、

そんなことは全く気にならず、俺の目の前には、今の今まで完全に存在を忘れていた美咲の顔が巨大に現れていた。

と同時に、扉の空いた向こう側の柱に見慣れた駅名があることに、俺は気が付いた。

「ああ、降りなきゃ」

危うく、電車のドアの所に立ったまま乗り過ごすところだった。俺は、慌ててホームに降り立ち、歩きながら携帯で美咲の番号に電話した。

「・・・おかけになった番号は電波の届かないところにあるか、電源が入っていないためかかりません。番号をお確」プチッ

美咲の携帯には繋がらなかった。

俺は、若干の不安を抱えたまま家の扉に鍵を差し込んだ。

朝の冷気を吸い込み、俺は、咳込んで目を覚ました。昨日の出来事など、何もなかったかのよういつも通りの朝を迎え、いつもと同じ満員電車で会社に向かった。

電車を降りようと、人と人の間をすり抜けているとき、ズボンのポケットで携帯が震えた。

「美咲？」

俺は、独り言のように呟くと、人の波に流されながら、携帯を取り出した。

『昨日はありがとう。お花、部屋に飾りました』

愛美さんからのメールだった。

俺は、一年がかりで、愛美さんとのデートに漕ぎつけ、クリスマスの夜にその本人が俺に好意を抱いていたという驚きの証言まで聞いてしまい、有頂天で今日の朝を迎えたと言うのに、なぜか、気分が晴れなかった。嬉しいことは間違いないのだが、頭の片隅には、美咲のことが気がかりで、何故、携帯が繋がらないのかの疑念がずっと重くのしかかり、愛美さんとの今後を喜んでばかりいられないような気持ちになっていた。実は、昨晚、あの後、二回も美咲の携帯にかけなおした。一度は、携帯を呼んだものの美咲が電話口に出ることはなく、長時間鳴らして、諦めと共に携帯を切った。そのあとは、また、電源を落とされたのか、携帯を呼ぶことさえなかった。

会社でも、昨日までのにやけ顔が嘘のように、落ち込んでいる俺に、同僚たちは、敢えて、クリスマスで何かあったのかを聞かないような気づかいまでしていた。そんなどんよりした俺の携帯が突然震えたのは、昼の休憩時間に入る6，7分前だった。

「もしもし美咲？？？なんで電話出ないんだよ」

俺は、部屋を出るや、携帯にむしゃぶりついた。

「ああ、着歴見たよ。今日、会えるんでしょ？」

「えっつ、う、ん」

少し元気のない美咲の声が若干気になったが、あまりに普通の返答に、俺は拍子抜けしてしまった。

「ねえ、何時？」

「えっ、ああ、たぶん、6時には」

美咲は、言葉少なに了解すると携帯を切った。

俺は、何を焦っていたのだろうか？やはり、愛美さんに後ろめたさを感じていたように、美咲にも、悪いことをしているような気持ちになっていたのだろうか？とりあえず、また、今日は美咲に逢える。俺は、落ち着きを取り戻し、昼の休憩を終えるとまた、仕事に戻った。今日は、外回りをせずに、一日内勤にした。

しかし、美咲の声に元気はなかった。そして、あのおしゃべりな美咲が、用件だけで電話を切ってしまった。正直、ちょっと気になったが、今日、会った時にでも聞いてみれば良いと思っていた。

会社の退勤の時間が迫ると、俺は、荷物を片付け始めた。

「田中君、悪いんだけど、この資料、まとめといってもらえるかな？」

「えっ！？」

部長の顔を見上げながら、俺は、愛美さんからもらった時計に目をやった。資料は10分、15分でまとめられるような量ではなかった。

「残業ってことですかあ？」

俺は、慌てて部長に聞き返した。

「悪いねえ、明日の会議で必要なんだよ。頼んだよ」

立ち去る部長の後ろ姿を見送りながら、俺はため息をつくと携帯を取り出した。

『悪い、一時間遅れる』

美咲にメールを送ると、不機嫌そうな顔を露わに資料の1ページ目をめくった。

やっと資料がまとめ終わって腕時計を見ると7時まであと10分ほどの時間になっていた。

「ああ、ちょっと遅れちゃうな」

独り言を呟くと荷物をかばんに詰めタイムカードを押し、駅まで走り出した。

駅のホームで電車が待ちながら、美咲に連絡しようと携帯を取り出した。

「えっ！？」

『1分でも遅れたら行っちゃうからね』

美咲からメールが届いていた。全く気付かなかった。美咲のぶっきらぼうな電話は昨日のことを怒っていたのだろうか？昼の電話を思い出しながら俺は、急に心配になってきた。時計の針は、もう、7時に差し掛かろうとしている。慌てて携帯で美咲の番号を押すと、また、腕時計に目をやった。電車は、音もなくホームに滑り込んできた。

俺は、美咲の声を聞く前に、携帯を切るとズボンのポケットに押し込んだ。急に雑音が俺の耳を支配したが、今の俺は、とにかく早く美咲のもとへ行くことだけで頭がいっぱいだった。

改札を駆け抜けると銅像を目指して人の波をかき分けた。

銅像の前まで来ると俺は、キョロキョロと辺りを見回した。雑踏は年末のサラリーマンと、師走のせわしなさと、人が入り乱れていた。でも、いない。美咲の姿はどこにも見当たらない。

「美咲っ」

俺は、心の中で呼びながら辺りを歩いた。不審なくらい、首を左右に振りながら辺りを探し回った。柱の陰や、喫茶店も覗いてみた。でも、見つけることはできなかった。

肩を落として、銅像の前まで戻った。何気なく銅像に寄り掛かった時、そのうなだれた俺の肩を誰かが叩いた。

「ずいぶん探してくれたから、もういいや」

ビクッとして叩かれた肩の方を向くと美咲がこっちを向いて立っていた。

「美咲い」

俺は、なぜか、このまま、もう二度と美咲に逢えないような気がして必死に探していた。しかし、不意に美咲の顔を目にすると全身の力が一気に抜けていく感じがした。

「よかったあ」

俺のホッとした顔を眺めていた美咲は、急に真面目な顔をして、

「ねえ、話があるの。二人きりになれるとこ行こ」

そう言うと俺の手を引き歩き出した。俺は、引きずられるように美咲に続いた。美咲の足は、一昨日のホテルの方へまっすぐ進んでいた。しかし、俺は、二日前、酔って歩いた道のりなどは、まるで分らなかった。今、美咲がどこへ向かっているのかさえ、まるっきりわからないまま美咲に先導されているのだった。